

押小路殿・二条殿の庭園

<http://www.kyoto-arc.or.jp>

(財)京都市埋蔵文化財研究所・京都市考古資料館



室町時代前期の庭園（西北西から）

地下鉄烏丸線と東西線が交差する烏丸御池の北西側にはビルが林立しています。その一角から、鎌倉時代に造営され、室町時代後期まで維持・整備された庭園を発見することができました。この庭園の移り変わりを紹介します。

調査地は中京区両替町通御池上^{きんがきちやう たつつけ}る金吹町内、龍池小学校の西向いです。平安時代以降、周辺に皇族や貴族の邸宅が営まれており、調査地にも平安時代中期には、後^ご朱雀天皇の皇后である禊子内親王の邸宅、鎌倉時代には、後鳥羽上皇

の御所^{おしこうじどの}・押小路殿があったと記録にのこされています。

承久^{じやうきゆう}の乱で後鳥羽上皇が隠岐へ流された後、この地は藤原道家を経て二条良実^{よしざね}のものとなり、それ以降、室町時代後期まで藤原氏二条家の本邸^{ほんどの}・二条殿として受け継がれました。二条殿は邸内の庭園が有名で『洛中洛外図』にそのようすが描かれています。

庭園の池は「龍躍池^{りゅうやく}」と命名され、調査地のある龍池学区の名称の由来となりました。近隣には二条殿町^{でん}・龍池町・御池之町という

縁^{ゆかり}の地名ものこされています。

調査で見つかった最も古い遺構は平安時代中期の2基の井戸です。このことから調査地に邸宅があったと推定できますが、庭園が存在したかどうかも含めて、詳しいようすは明らかではありません。

鎌倉時代になると地面を削って高さ約1mの段差が作られ、東側が高く西側が低い地形が作り出されて整備されます。段差の西側には礎石を用いた細長い建物が作られますが、この場所は平安時代中期の井戸底と比較して水が湧い



『洛中洛外図』に描かれた二条殿
「洛中洛外図屏風」米沢市上杉博物館所蔵（部分）

ていてもおかしくない深さなので、建物の間近まで池の汀^{みぎわ}が寄せていたのでしょう。

その後、段差の西側は整地が行なわれ、雨落溝をもつ別の建物が作られます。建物の東側と西側には1基ずつ庭石が据えられます。また、整地により池の汀は西へ移ったと考えられ、これにともなって溝や石組が作られました。

室町時代になると、段差の西側にたびたび整地が行なわれ、庭園が整備されました。室町時代前期の庭園は、池に小石を敷き詰めた緩やかに湾曲する洲浜が作られ、庭石を配置した美しい景観をつくり出します。池は南西側へ向かって調査地の外側へ広がります。

室町時代中期の庭園は、前期のものと同様ですが、白砂のみで洲浜が作られ、庭石がありません。また、東側の高まりには建物が作られます。建物は庭園にともなう施設であったと考えられます。

室町時代後期の庭園は、小石と白砂をまばらに敷いた洲浜が作られ、庭石は高い方に1基、一段下

がった低い方に2基が据られています。また、東側の建物も建て替えられます。

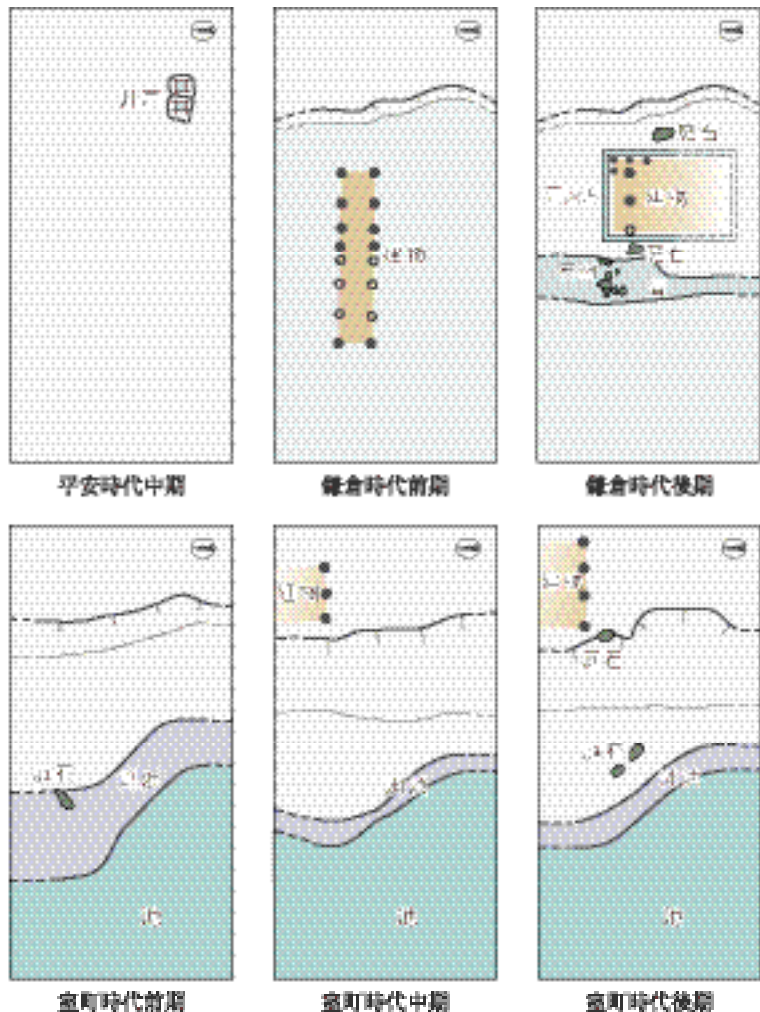
二条殿の庭園は名園として知ら

れており、整備の機会ごとに意匠を尽くした作庭が行なわれたのでしょう。鎌倉時代に削られた段差は緩やかになっていきましたが、東側の高まりと池の底とでは高低差が2mほどもあり、立体的な造形がこの庭園の特徴でした。

『洛中洛外図』に描かれた庭園は、時代の移り変わりの中で、巧みな造園をくり返しながら維持されてきたことが、今回の調査で明らかになりました。

また、現在は完全に都市化した調査地で、龍池学区の名前の由来となった遺跡を発見できたことも大きな成果といえるでしょう。

（山本 雅和）



庭園の変遷（1：500）